

極楽寺山の植物相と植生

一 はじめに

極楽寺山は、瀬戸内海国立公園の一角というよりはむしろ、地元では、観音山の愛称で親しまれ、四季を通じて登山客の絶え間がない。しかしながら、広島県の他の名勝地、例えば宮島、三段峡などと比べると、極楽寺山植物の研究は十分なされたとはいいがたい。結城・磯貝(1935)の「広島を繞る山の研究・第一輯」において、108頁を費して、極楽寺山について詳細に論じられているが、残念なことに、植物については触れられていない。ただ巻末の付図「極楽寺山登山路」に書き込まれた目標物としての植生状況が、現在から見ると、貴重な記録となっている。

中西(1955)により、極楽寺山頂のモミ林が本格的に生態学研究の対象とされた。広島市立基町高校生物部は、1952年頃より一貫して現在に至るまで、極楽寺山の生物相を研究しており、きわめて貴重な資料と標本が保管されている。

その成果の一部は、1961年に「極楽寺山採集会記録」として発表された。これは、とう写版刷の小冊子ではあるが、極楽寺山全域の植物相の記録としては、はじめてのものであろう。

これには、菌類、セン・タイ類、高等植物の目録があり、ルートマップ形式の植生図もあって、興味深い。

津郷(1965)は、宮島のモミ・ツガ林の研究に際し、極楽寺山のモミ林についても調査し、比較している。

1969年に文化庁より「植生図・主要動植物地図、広島県」が発刊され、「学術上貴重な生物群集」として、極楽寺山山頂地域が挙げられている。関(1971)は、極楽寺山のモミ自然林を、広島県各地の森林と比較している。渡辺(1972)は、暖帯極相林の植生として、極楽寺山のモミ林の組成表を載せている。

以上が、極楽寺山の植物についての、従来の研究の概要である。その他、分類学的研究の資料として、本地域からの標本が引用されているものが多いが、それらは省略した。

筆者は1954年にはじめて、極楽寺山に植物調査を行なって以来、いつかこの地域の植物をまとめて見たいと思っていた。此度、廿日市町郷土文化研究会より、本誌への投稿の好機を与えられ、調査不十分の点もあるけれども、ここに極楽寺山の植物相と植生の一端をまとめてみた。

二 調査地の概要

極楽寺山は、広島県佐伯郡廿日市町と五日市町にまたがり、五万分之一地形図「広島」図幅の左下方に位置する。中国山地は、脊梁面(高位面)、吉備高原面(中位面)、瀬戸内面(低位侵食面)の三段の侵食面よりなるが、多井(1966)によれば、極楽寺山は吉備高原面にあたる。山頂付近一帯は、海拔600米前後の平坦面をなし、瀬戸内側へは急傾斜をなしている。

「上不見山」という寺の山号は、この地形をよく表現している。地質は、全域がほとんど花こう岩よりなり、山頂部平坦面の一部には、地質学的に興味深い山砂利層がある。中国地方小気候区分では、本地域は山陽区の西端に位置するが、現地での気象観測資料がないので詳しいことは、よくわからない。

調査地域は、極楽寺山の廿日市町側に限った。調査地域の東縁は五日市町との境界線、北縁は七曲峠から、山頂平坦面の600米等高線、西縁は七曲峠から橋本、下平良を結ぶ山麓縁辺、南縁は国道バイパスとした。この地域の面積は、約6.3平方キロ米、海拔高は、30米から690米にわたっている。

三 植物相

この地域から、自生植物として、シダ植物57種、裸子植物9種、被子植物48種(単子葉128、離弁花218、合弁花141)、計443種を確認した。基礎資料は、1954～73年の

筆者の調査ノートおよび標本、それに基町高所蔵の標本で、スゲ属の一部については、岡本香(1965)を参照した。これらの種の目録は末尾に付してある。

注目すべき植物としては、次の種がある。

ヤマドリゼンマイ 東アジアの寒冷地の湿地に分布するシダで、西南日本では少ない。

ヤシャダケ 竹の一種であるが、小形で笹のように見える。まれな種で、以前は佐方川に沿って点々と見られたが、護岸工事のため減少した。登山口付近の川岸にある。

クマザサ? 山頂部平坦面一帯海拔600~500米と、一部本道に沿って、海拔125米、165米、320米でも見つかった。ササ属の専門家である鈴木貞雄博士に同定を依頼した結果、クマザサに近いが、なお検討を要するとのことであった。

イタチガヤ イネ科の小草本で崖地に生ずる。堀川(1973)によれば、インド、マレーシアから分布して、極楽寺山付近が、ほぼ北限にあたる。下平良の海拔40米でわずか見つかった。

エビメアヤメ 堀川(1950)により極楽寺山よりほうこくされた。大陸要素の小型のアヤメで、花季を逃がすと発見しにくく、筆者は極楽寺山でまだ確認していない。日本では、九州、北四国、広島県に点々と分布しているが、希品であり、三原市沼田西町には国指定の天然記念物がある。

キエビネ 基町高標本1963・5・3伊藤・唐沢(1969)の分布図によれば、本種は、中国地方では山口県西部にのみ知られている。黄色の大形美花を開くラン科植物で花期には発見が容易であるが、筆者はまだ確認していない。

チョウジザクラ 基町高標本1963・6・4・No. 16本州、九州に分布するが、まれな種で、本県では帝釈峡から知られている。山門付近で採集された由で、栽植されたのかも知れないが花の美しい桜ではなく、ふつう植えない。

ミズオトギリ 東アジアの湿地に分布し、広島付近ではまれである。蛇の池堤防下にわずか生じている。以前は多かったが、憩の森の造成のため、激減した。

レンゲツツジ かば色の大形の美花を開き、湿地に生ずる。九州にも分布しているが、極楽寺付近がほぼ南限に近い。冠高原のものは、県指定の天然記念物になっている。極楽寺山のは、量が少ないので、保護を要する。

ヒキヨモギ 基町高標本1952・9・20 黄花の美花を開くゴマノハグサ科の半寄生草本で、まれな種である。

リュウノウギク 堀川(1972)によれば、分布の西限にあたる。

四 植生

堀川(1968, 1972)の「日本の植生地図」によれば、極楽寺山付近の地域は、常緑広葉樹林(シイノキ群系)と、中間針葉樹林(ツガ群系)の二つを持っていることになる。この区分は、いわゆる「潜在自然植生」であって、現在の様相とは異っている。すなわち、太古には、極楽寺山の約500米以上はツガ群系で、それ以下の低地はシイノキ群系であったことが推定される。

しかしながら、数千年前からの人類の活動で、極楽寺山の「自然植生」はしだいに破壊され、山頂部のモミ林と湿原にのみその名残をとどめ、大部分は人類の影響による「人為植生」となってしまった。

このような「現存植生」にもとづいて作られたのが、文化庁(1969)の「広島県植生図」である。

これでは、極楽寺山は、アカマツ—常緑広葉樹林とモミ—ツガ林に塗り分けられている。

筆者の調査では、極楽寺山(調査地域は第二章参照)から、自然植生として、(1)モミ自然林、(2)湿原を確認し、人為植生として、(3)アカマツ二次林、(4)伐採跡地、(5)植林、(6)耕作地および耕作放棄地、(7)侵食地、(8)路傍および路上植生 が認められた。

第一図には、これらの一部が、極楽寺山の現存植生図として図示されている。この植生図は、廿日市町所蔵の航空写真を参考にして、筆者の現地調査によって描いたものである。

(1) モミ自然林

極楽寺山頂部の本堂、奥の院をとりまく寺有林で30.9ヘクタール、海拔500~690に米にわたり、全国的に見ても屈指のモミ自然林である。植生の調査結果を第一表にしめす。

モミ林の植物社会学的研究は、鈴木時夫(1961)によって行なわれ、モミーシキミ群集としてまとめられた。鈴木博士は、これをアセビ亜群集、ヒメシャラ亜群集、アカガシ亜群集に区分し、さらにアセビ亜群集の中には、ウスギヨウラク変群集、シラキ変群集を区別された。

極楽寺山のモミ自然林の資料(第一表)を、これらと比較してみると、いずれともうまく一致しない(第二表参照)。

その理由として、鈴木博士の使用した資料が、モミの全分布域を網羅したものでなかったことにもよるが、極楽寺山のモミ林が、かなり独自の性格を持つものであることによると思われる。第二表には、参考のために、宮島、四国の資料も付しておいたが、更に精しい検討は今後にまらたい。

極楽寺山モミ自然林の特徴は、アカガシ亜群集の要素を強く持たながら、アセビ亜群集の要素も強く、両者の中間的性格を持っていることである。山中(1961)は、四国のモミ林の研究において、鈴木(1961)の他の亜群集の識別種も多いとしながら、アカガシ、ヒサカキ、ヤブツバキ、ヤブニッケイ、シロダモを持つことから、アカガシ亜群集に属させている。これらの種は、シロダモ以外、極楽寺山にも多く出現している。

一方、本地域には鈴木(1961)のアセビ亜群集の識別種アセビ、サルトリイバラ、コシアブラ、ミヤマシキミ、タムシバ、ウラジロノキも多く、ここでは亜群集の区分には触れずに、一括してモミーシキミ群集として取扱っておく。

極楽寺山モミ林の注目すべき種は、ウスギヨウラク、シロモジ、サンヨウアオイである。宮島のモミ林には、ウスギヨウラクとシロモジを欠如している。

ウスギヨウラクの存在は、ウスギヨウラク変群集との関係で興味深く、シロモジは典型的なソハヤキ分布の植物であって、四国のモミ林にも出現している。

サンヨウアオイは、広島県の沿岸部には多いが、分布の限定された種である。

極楽寺山頂部のモミ自然林は、相観的にモミの優占する部分と、モミが少なくアカマツの優占する部分がある。

第一表の調査資料はモミの優占した林分に偏っているためか、種組成の面で両者を区別することは困難であった。

しかし、植生図上には、航空写真から判別できる限り、両者を区別して表現した。

極楽寺境内および寺有林内には、モミ・アカガシ・ツクバネガシの大木が多く、特に大きなものは、本堂西側の石垣端にあるアカガシで、根囲り7.75米に達している。

また、有名な大杉は、胸高周囲5.35米に達している。樹高の測定は、精密に行なうのが困難であるので、今後の機会にまらたい。

このように立派な自然林は、きわめて貴重な存在であり、国立公園の指定は受けているが、更に一層の保護対策が強く望まれる。

展望をよくするために、樹冠の一部を切り開いているところがあるが、これは森林内に光を導き入れて、林床の植生を変化させると共に、切られた樹冠部につる植物が繁茂して、林相が変化するおそれがある。

(2) 湿原

夫婦檜から蛇の池に向う途中、キャンプ場の炊飯場一帯の谷間に湿原がある。また蛇の池畔にも湿地が見られる。

調査結果は、第四表にしめされている。これは、堀川・鈴木・横川・松村(1959)により八幡高原から報告されたヌマガヤーマアザミ群集に属すると考えられる。

野貝原湿原については、枝松・関(1962)により、本誌上に発表されたが極楽寺山湿原によく似ている。

ただ野貝原では、ヤチカワズスゲ、ヒメシロネが少なかったが、極楽寺山では多くなっている。蛇の池は人工的な貯水池であるが、古いから自然的な湿地植生および水生植物群落が見られる。その一部は第四表にもあげてある。

ミソハギは、夏期に紅紫色の美花を開き、盆花としても用いられるが、蛇の池の堤防付近に見うけられる。廿日市町作成の極楽寺山案内パンフレットにはこの花の美しいカラー写真が載せられている。ジュンサイはスイレン科の植物で、その芽を吸物に使用するので有名である。

蛇の池のものは植えたのかも知れない。

湿原は、流入水と流出水の微妙なバランスの上に成立している自然の最も弱い部分の一つである。湿原は、自然の生きた「生態学実験室」ともいうべき所で、花粉分析の研究など重要な意義を持っている。

湿原の保護の要点を述べると、1、汚水、土砂を流入させない。2、人が踏み込まない、3、水位を変動させない、の三点である。

憩の森炊飯場付近および便所からの汚水処理には、十分な配慮がのぞましい。また、広場方面からの路面上の水が、側溝が不完全のため、湿原内に流入し土砂が堆積している。早急に側溝の改修がのぞまれる。入の踏み込みに対しては、湿原の棘植物のためか、あまり入が入っていない。炊飯場へのコンクリート橋が出来たので、踏みつけは、さけることが出来た。水位の変動については、堰堤が現在のところ、十分に排水しているので、増水はしていない。しかし、しだいに土砂が堆積するおそれもあるので、堰堤上面に数十センチの深さの排水溝を作るべきである。

(3) アカマツ二次林

極楽寺山山腹の大部分と上部平坦面には、アカマツ二次林が広く分布している。これらの中には、もとシイノキ林であったり、モミ林であったりしたものが含まれ、人為の加わり方の程度によって種々の様相をしめしている。

第三表には、極楽寺山から得た資料をしめしているが、その下位区分については、資料不十分のため、触れないでおく。

全体としては、豊原(1967)のアカマツ—コバノミツバツツジ群集コナラ亜群集の典型変群集に含まれると思われる。

山陽地方の内陸部に分布するコシアブラ変群集が、上部平坦面に出てくる可能性もあるが、現在のところ、一応全部典型変群集にあたりと考えられる。

伐採跡地の資料は、第三表の一部にのせてあるが、もっと調査の必要がある。

植林地については調査不十分である。第一表には、スギ植林地の資料(S7)が一つ入っているが、このスギ植林地は、高木層にスギが優占する以外、周囲のモミ林と同じ組成である。

耕作地、路傍、侵食地などの植生は、今後の研究にまきたい。

五 まとめ

極楽寺山の植物相として、シダ植物57種、裸子植物9種、被子植物487種、計553種が確認された。

自然植生として、モミーシキミ群集が寺有林一帯に、ヌマガヤ—マアザミ群集が憩の森の湿原と蛇の池畔に認められ、人為植生として、アカマツ—コバノミツバツツジ群集のコナラ亜群集典型変群集が広く分布している。

極楽寺山のモミ自然林および湿原は、きわめて貴重な自然植生であり、十分な保護対策がのぞまれる。